

近世明石における城下町プラン

石 田 曜

I. はじめに

- (1) 研究目的
- (2) 分析対象の史料

II. 明石城下町の概要

- (1) 明石城下町の位置
- (2) 明石城下町の形成過程

III. 城下町プランの類型

IV. 明石の町人地プラン

- (1) 町割・屋敷割の構成
- (2) 町割プランの特色

V. おわりに

I. はじめに

(1) 研究目的

日本では戦国時代から江戸時代前期にかけて、すなわち16世紀末から17世紀末に多くの城下町が建設された。城下町は、それぞれ固有の特徴を持ち合わせているが、藩領における最重要の核であり、政治・経済・軍事あるいは文化の最上位の結節点であった¹⁾。

城下町の特徴を類型化した矢守一彦の城下町プランは、地理学における城下町研究の分野に欠かせないシェーマである。矢守は、城下町を戦国期型・総構え（総郭）型・内町外町型・町屋外郭型（郭内専士型）・開放型の5つに分類した²⁾。さらに、町割・屋敷割プランについての定型も述べている。近年、関戸明子³⁾、川名禎⁴⁾、渡辺理絵⁵⁾、土平博⁶⁾らに

よって、個々の城下町に関する歴史地理学的な新しいアプローチが進展している。

関戸は矢守によって分類された城下町プランについて、高崎・館林など個々の城下町を事例に再検討を図っている。川名は共通性が強調される城下町研究の中で、分散城下町である関宿を取り上げることで、その特殊性から近世城下町の本質とされる空間構造を解明した。渡辺は城下町研究の基本史料としての城下町絵図を再検討することによって、新たな城下町研究の視角を提示する。また、城下町絵図の作成背景・利用目的などの精緻な分析は、城下町の空間構造の解明に寄与すると主張する。さらに、土平は1万石クラスの大名家が治めた陣屋町・小城下町を対象とし、その都市形態を明らかにした。その上で、町割図の作成について、当時の政治的・社会的背景を捉えなおす必要があることを示唆している⁷⁾。

このように、個別城下町の研究および城下町絵図の再検討は今日も城下町研究の主要テーマであるといえる。これらの研究は、矢守が未着手であった小城下町や、個々の城下町プランの再検討によって、研究意義を再確認している。

本稿で取り上げる明石は、元和偃武以降の新興城下町であり、本城下町を再検討することは、近世における新興城下町が持つ形態・機能の解明にとって、大きな意義があると考

キーワード：近世城下町，明石，城下町プラン，形態論，絵図

えられる。

近世の明石に関する研究としては、中部よし子が歴史学の立場から城下町における町人地の機能を考察している⁹⁾。その他、宮本博が絵図の間数について、近現代の地図を比較し、町割について間口と奥行を算出している⁹⁾。従来の明石城下町に関する研究の多くは、明石城に関する考古学・歴史学によるもので、城内の土塁や櫓、城主の変遷が考察されている¹⁰⁾。また、武家屋敷を中心に考古学調査も近年着手されている¹¹⁾。その一方で、城下町絵図を用いた町屋地区の分析は試みられていない。そこで本稿では、明石を対象とし、絵図の詳細な分析から、その城下町プランを検討し、その上で、近世城下町の空間構成を明らかにすることを目的とする。

(2) 分析対象の史料

近世明石城下町に関する史料のうち、主に利用するのは以下の3点である。なお、それぞれの史料は、いずれも翻刻されている¹²⁾。

まず、太田小左衛門編纂の『采邑私記』が挙げられる。現在確認できる明石に関する最古の地誌とされる¹³⁾。記録期間は、内容から元和3(1617)年から元禄14(1701)年ごろと推測できる¹⁴⁾。城下町の歴史、町名、橋、社寺などの記載、および城下町郊外の情報が述べられている。また、全文が漢文によって記録されていることも特徴といえる。

長野升太夫編纂の『明石記』は、明石藩に関する最も詳細な地誌である¹⁵⁾。上巻の「金波斜陽」と下巻の「玉彩光分」に分かれ、前者は明石郡、後者は美裏郡の町人地や地子免税策の概要などが記されている。記録期間は、享保年間(1716~1735)であるが、享保6(1721)年の内容が大半を占める。

最後に『元和二辰年明石御代々御城主様御入国并町割年号記』(以下、『町割年号記』)では、明石城下町の建設初期から天明2(1682)年までの変遷が記載されている¹⁶⁾。

第八代城主松平直明の明石入封に際して家老として追従してきた織田家に保存されており、記載内容の末尾と入封時期が一致しているため、引継ぎ文書として作成された可能性がある。内容は箇条書きであり、時代区分・城主の転封など多彩にわたる。

絵図史料については、明石城下を描いた絵図として、14点の資料が確認されている¹⁷⁾。ほとんどの絵図は、南北は城郭から瀬戸内海、東西は東新町から西新町といった範囲で描写されており、城下町の中心部を明示している。本稿では、城下において町割もしくは屋敷割が記載されている以下の絵図を取り上げる。

①正保2~承応3(1645~1654)年「播磨国明石城図」(内閣文庫蔵正保城絵図)

②万治2~延宝7(1659~1679)年(推定)「播州明石図」(『講座明石城史』所収・付図2)

①は正保元(1644)年に徳川家光が全国の諸大名に城絵図の提出を命じ、その際明石藩から提出されたものである。第四代城主大久保季任の時代の絵図であるが、それ以前の城下町絵図が確認されていないため、現存最古の城絵図である。一方で、凡例や屋敷割の記載といった、一般にはみられない内容も描かれ、正保絵図としては疑問視もされる¹⁸⁾。しかし、寺社の配置や間数の正確さから、史料として有用であるといえる。なお、これ以降の絵図は、本城図から発展した様子が描かれている。このことから正保元~承応3(1644~1654)年は、明石城下町の基礎プランの確立期と考えられる。

②には、侍屋敷地区の詳細な間数と33の家臣名が屋敷ごとに記載されている。この家臣名は第六代城主松平信之一門の重臣と合致する¹⁹⁾。一方で町屋に関する記入事項は無いが、1軒ごとの屋敷割が確認できる。なお、『町割年号記』には、「一、延宝六年町中絵図被仰付候、并二小名初而付キ申候」とある。城主も一致しており、延宝6(1678)年作成

と推測できるが、確実とはいえない。所蔵先は第七代城主本多政利に家老職・番頭役で仕えた中根家であり²⁰⁾、引継ぎ絵図として使用された可能性が高い。

II. 明石城下町の概要

(1) 明石城下町の位置

明石海峡に臨む明石は、古代から景勝地・戦略地点として知られ、また海上交通の要衝として注目されてきた²¹⁾。

明石は、明石川が刻む段丘とその沖積平野から構成される。眼前に瀬戸内海の東の出口があり、明石海峡を望むこの地は対岸の淡路島までわずか4 kmの地点にある(図1)。

中世明石の地には、明石川の右岸に船上城が立地していた。しかし、小笠原氏の入部の際、海岸まで250mというその狭小な城下町は、それ以上の拡大が見込めないため、移

転、新興するに至ったと考えられる。

明石に築城された理由として次の2点が挙げられる。①姫路城より西の外様大名を仮想敵国とした場合の後衛地となること、②元和元(1615)年、初代城主小笠原忠真の姉婿・蜂須賀至鎮が阿波城主となったこと²²⁾。つまり、淡路島は徳島領であったので、幕府は姫路藩、明石藩、徳島藩の軍事力によって西国の外様大名への備えとさせた。したがって姫路城が落城した際には、明石が第二の防衛線になると想定されていたことが考えられる。また、姫路城、明石城、尼崎城²³⁾によって三段構えの防衛体制をとったといえる²⁴⁾。

姫路城・尼崎城・洲本城を線で結ぶと、図1のような三角形が描ける。明石城は、この三角形のほぼ重心に位置する。明石における城下町建設の意義として、3つの城の重心という戦略的位置にあったことが確認できる。

(2) 明石城下町の形成過程

表1に示すように、明石藩の城主は頻繁に入れ替わっている。また、石高をみると、初代城主小笠原忠真の時代が最も多く10万石となる。その後松平氏、大久保氏、本多氏などが城主となるが、いずれも7万石前後であり、石高としては平均的な城下町である。この地に入る大名は全て増封となっており、さらに他藩へ転封の際にも加増されていることも特徴といえる²⁵⁾。

明石城下町における町屋の変化に関する主な事項を表2に示した。城下町建設に最初に着手したのは初代城主小笠原忠真²⁶⁾である。『町割年号記』によれば、小笠原氏が城主であった時期に、11町が地子免除されていた。また当時、町人として大明石村・中之庄村の人々を迎え入れている²⁷⁾。大明石村は侍屋敷の一带²⁸⁾に、中之庄村は明石川河口に位置していた。

小笠原氏の代に成立したのは、鍛冶屋町・細工町・東魚町・西魚町・東本町・西本町・

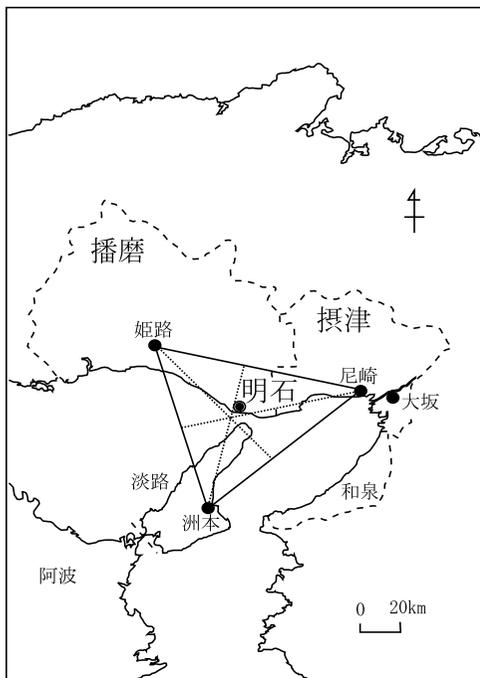


図1 近世明石城の位置とその周辺城郭

西岡虎之助・服部之総監修『日本歴史地図』全国教育図書、1956をもとに作成。

表1 明石の歴代城主

代	氏名	入部以前	禄高	在任期間	期間
1	小笠原忠真	信州松本(8万石)	10万石	元和3(1617)年～	16年
—	本多忠義		幕府直轄在番 (5万石)	寛永9(1632)年～	6ヶ月
—	本多政勝		同(4万石)		
2	松平康直(戸田家)	信州松本(5万石)	7万石	寛永10(1633)年～	1年
3	松平光重		同上	寛永11(1634)年～	5年
4	大久保季任	美濃加納(5万石)	同上	寛永16(1639)年～	11年
5	松平忠国(藤井家)	丹波篠山(5万石)	同上	慶安2(1649)年～	11年
6	松平信之		6万5千石	万治2(1659)年～	21年
7	本多政利(越前家)	大和郡山(6万石)	6万石	延宝7(1679)年～	4年
8	松平直明	越前大野(5万石)	同上	天和2(1682)年～	20年
9	松平直常		同上	元禄14(1701)年～	43年
10	松平直純		同上	寛保3(1743)年～	21年
11	松平直泰		同上	明和元(1764)年～	21年
12	松平直之		同上	天明4(1784)年～	2年
13	松平直周		同上	天明6(1786)年～	30年
14	松平齐韶		同上	文化13(1816)年～	25年
15	松平齐宣		8万石	天保11(1840)年～	4年
16	松平慶憲		同上	弘化元(1844)年～	26年
17	松平直到		同上	明治2(1869)年～	5ヶ月

黒田義隆 『明石藩略史』 明石葵会, 2004, 7-44頁をもとに作成。

表2 明石城下の変遷

	事項
元和4(1618)年	明石築城開始。同時に宮本武蔵によって町割図の作成。
元和6(1620)年	明石町中の地子を免除。
元和3(1617)～寛永9(1632)年	小笠原氏の代の明石城下町の町数は11である。
正保2(1645)年	明石城下改の絵図を作成。
正保3(1646)年	東新町が南側へ建つ。
寛永16(1639)～慶安2(1649)年	大久保氏の代に、信濃町を中町と改称した。
慶安4(1651)年	西新町の西側に家が建った。大坂屋六兵衛の屋敷の西側と南北側ができた。 長林寺前から、中庄さなぎ明神鳥居の近辺まで家が建ち、これを新浜北輪と呼んだ。
延宝6(1678)年	町中の絵図を作成して町中に小名をつけた。(元町14町、小名25町、計39町)
延宝8(1680)年	東新町、西新町、新浜を惣町分とした。 西新町大坂屋六兵衛屋敷の東側(西新町東輪)ができた。長さ6町余り。
享保2(1717)年	船町が分かれて船町・戎町となった。
享保8(1723)年	新浜南輪屋敷ができた。

黒田義隆 『明石市史 上巻』 明石市役所, 1960をもとに作成。

東樽屋町・西樽屋町・信濃町（後の中町，以下では中町）²⁹⁾・材木町・明石町の11町である³⁰⁾（図2）。明石城下町には職業が冠された町名が目立つが，近世初頭の町立てにおいて，意図的に同職種の商人や職人が集在させられた可能性があろう。大明石村・中之庄村，もしくは中世明石における中心都市船上から組み込まれた人々は，材木町から戎町・船町にかけての足軽屋敷付近に居住していた³¹⁾。このように小笠原氏の直属の商人と在地の町人を統合することによって，明石の町人地は形成された。後に，大久保氏の代の正保3（1646）年に東新町（現在の相生町）が建設された。

延宝6（1678）年には松平氏により町中の絵図作成とそれに伴う小名³²⁾が設定され

た。小名は町名の小字として捉えることが可能であり，町の細分化が進行したといえる。享保2（1717）年には船町が分割され，船町と戎町となり，町の拡大が推進された。また翌年には船町を恵美須（小名）と呼ぶこととなった。

城下町の戸数と人口については，表3に示した。現存史料では，城下町建設が始まった元和4（1616）年から50年程度，そして享保6（1721）年から明治元（1868）年までの戸数・人口が確認できていない。惣町中，戸数は恒常的に増加しているのに対し，宝永6（1709）年を境に本家数と，借家数が逆転する。これは，城下町が発展し，人口が他所から流入してきたことを表していると考えられる。

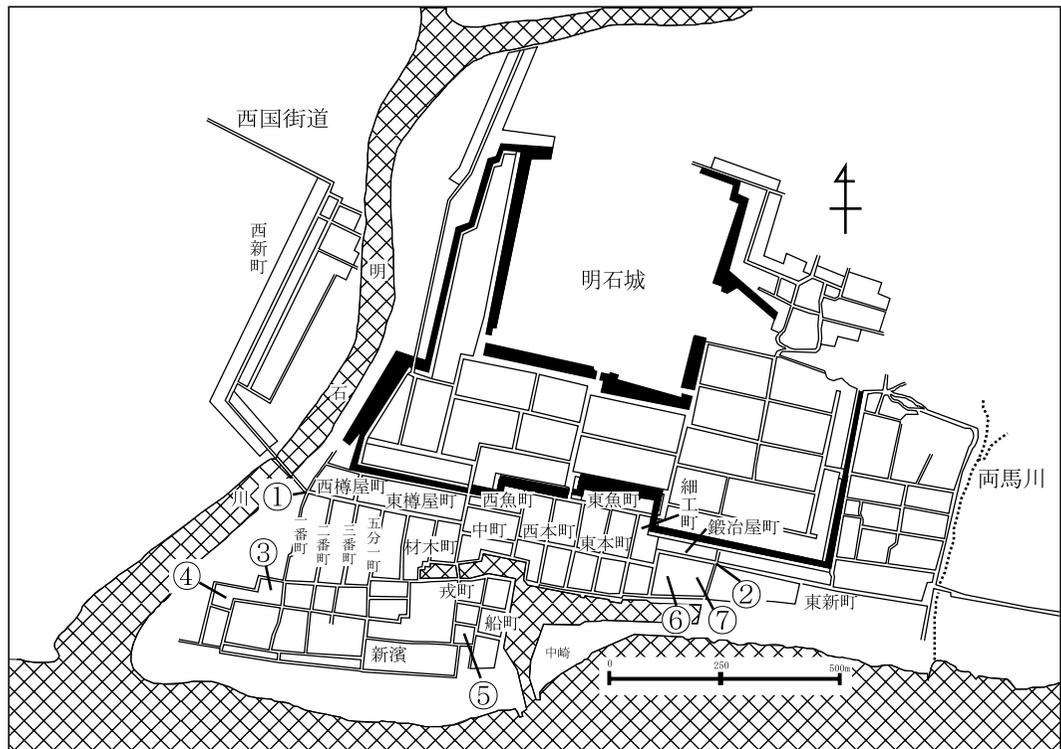


図2 明石城下町における主要地名と主要施設

松崎豊三郎『兵庫県明石市土地宝典 地番地積賃貸価格等級入図』大日本帝国市町村地図刊行会，1937をもとに作成。

①姫路口門，②京口門，③善楽寺，④無量光寺，⑤岩屋神社，⑥浜光明寺，⑦光明寺

表3 明石城下町の人口・戸数の推移

	惣町中戸数	本家	借家	人口
万治2(1659)年	1,092	591	501	—
天和3(1683)年	1,359	732	626	8,415
宝永6(1709)年	1,760	860	900	—
享保6(1721)年	1,903	822	1,081	8,922
明治元(1868)年	2,500	—	—	—

出典) 岡田進裕・黒田義隆『明石市史上巻(複製版)』明石市役所, 1992, 42-54頁, および中外印刷(株)『西攝大観郡部』(複製版)中外書房, 1965, 227-228頁をもとに作成

注1) 惣町中戸数, 本家, 借家の単位は軒, 人口は人である

2) 天和3(1683)年では, 新濱57軒が別項として記される。

Ⅲ. 城下町プランの類型

明石の城下町プランについて, 矢守は「明石が, 居付の外様大名が旧来の戦国期城下町を部分的に近世プランに改編したような場合とは, くらぶべくもないほど〈幕藩体制〉的城下町プランを実現し…近世城下町プランとしての完成像とも目される」と述べている³³⁾。ここでは, 矢守が完成像とする明石のプランを再検討してみたい。

明石城下町は, 軍事的に重要な拠点であった。幕府から銀1,000貫目を支出されていることから明石築城が重視されていたことが窺われる³⁴⁾。

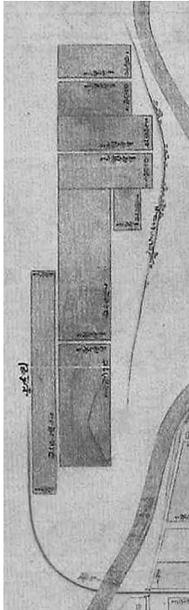
図3・図4から明石における身分別地域制が確認できる。矢守は「侍屋敷は街区状をなして外郭内に収められ, 土庶居住区が明確に分離されている」³⁵⁾と述べる。しかし, 両図で確認すると, 侍屋敷が外堀(外郭)外に進出している。このことから, 正保年間(1644~1648)以降の明石は郭内専士型とはいえない。一方, 地形的にみると総構え型(総郭型)と捉えることもできる。矢守は, このことに関しては, 郭内専士型, 総構え型の両方をみることができるとする。以下では, 史料から読み取れる明石の城下町プランの変遷を検討し, 時系列的に発展段階を考察してみたい。

城下町の範囲については『明石記・上巻

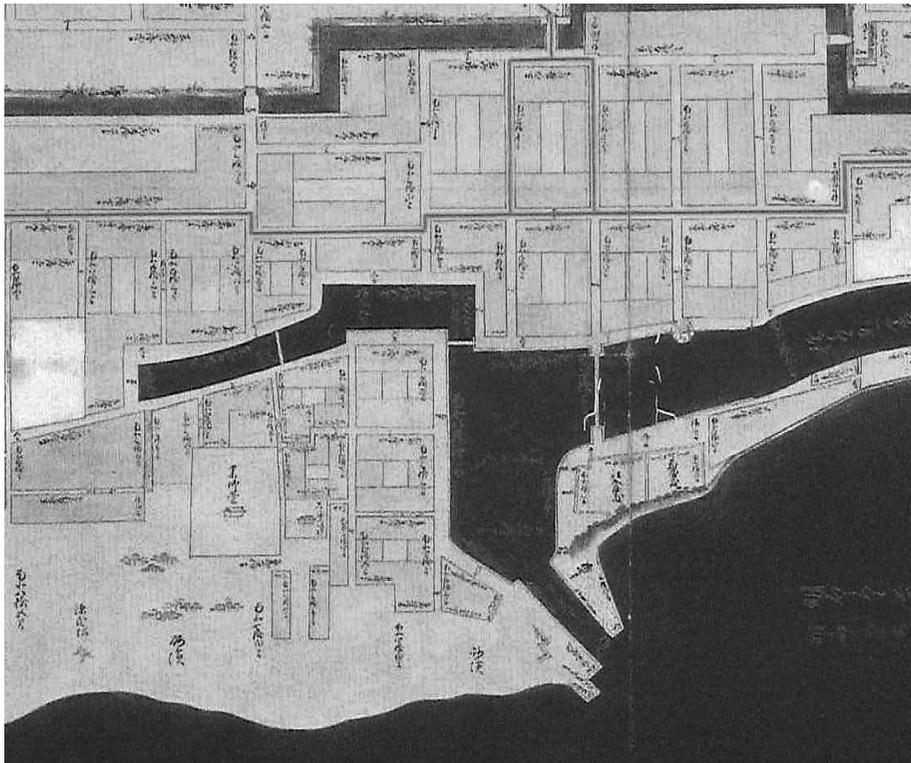
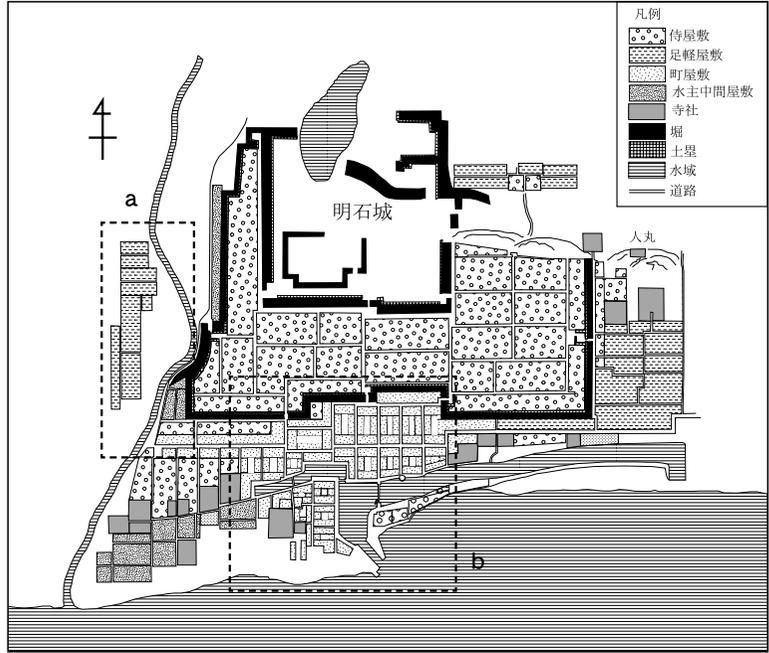
(金波斜陽)』(享保(1716~1735)年間)(以下, 『明石記(上)』)に具体的に記されている。その範囲は, 「明石東西1274間1尺此丁21丁14間1尺, 内東新町266間, 此町4丁26間, 京口御門ヨリ姫路口御門迄599間半此丁10丁, 明石川間78間此丁1丁18間, 西新町370間半余此丁6丁10間半余, 明石町南北234間半余此丁3丁半24間半余」³⁶⁾であり, この記述から当時の明石城下の範囲は, 東新町から西新町までであると読み取れる。ただし, 初期段階の範囲を想定する場合, 木戸とされた姫路口門から京口門の距離を考慮する必要がある(図2参照)。この範囲は599間半とある。一方, 南北は234間半で, 初期から一貫しているといえる。実際, 海岸が広がった現在も追手門付近から海岸までは500m程度しかなく, 非常に狭長な城下町であったことが窺える。

さらに, 明石城下町の総構えについて検討する。総構えの施設は, 姫路口門の南を起点として, 明石川左岸を南下, 河口近くより左に折れ岩屋神社までつづく長い土居が城下西から南を囲み, 南東部も中崎が防波堤として土居の役割を演じている。西側の防御が非常に強固で, 西から西新町の足軽屋敷, 明石川, 土塁と3重に外郭が形成されており, 土塁の内側には善楽寺, 無量光寺といった寺院も配備されている。

しかし, 東部については, 京口門³⁷⁾付近の寺院の配置による防御性は読み取れるが,

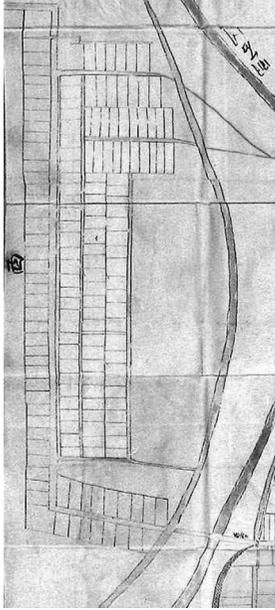


拡大図 a 西新町付近

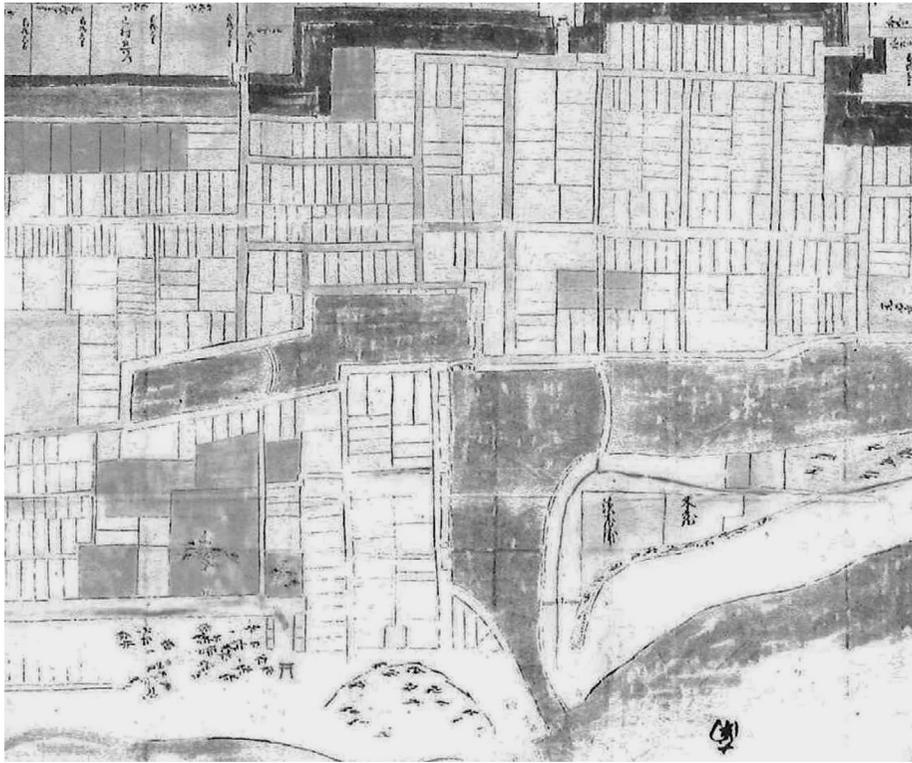
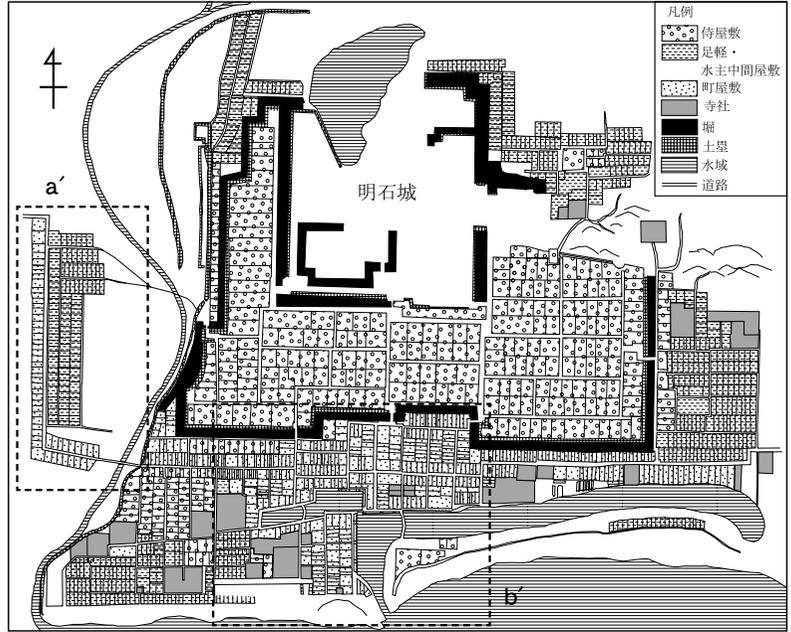


拡大図 b 追手門付近

図3 「播磨国明石城図」(正保2~承応3(1645~1654)年)のトレース図と部分図
 「内閣文庫蔵 正保城絵図播磨明石城図」をもとに作成。



拡大図a' 西新町付近



拡大図b' 追手門付近

図4 「播州明石図」(万治2～延宝7(1659～1679)年)のトレース図と部分図
明石城史編さん委員会『講座明石城史(付図2)』明石市教育委員会, 2000をもとに作成。

外郭が存在しない。ただし、「明石町旧全図」(文久3(1863)年)には最東端の位置に両馬川を確認することができる。現在その位置に河川はないが、明石市人丸前に両馬川旧跡が残っている。このため東の外郭は両馬川であったと考えられる。東側に土塁や堀を形成するということは、幕府に対する警戒の表れとなるため、防御施設を作らず、最低限の守りとして両馬川が利用されたと考えられる。また、各絵図からも両馬川以東の発展が確認できないため、両馬川が城下町の境界となっていたといえる。

以上から、明石において東の防御を両馬川と想定した場合、西は明石川、北は明石城北の柵と土塁³⁸⁾や北出輪³⁹⁾、南は瀬戸内海、中崎といった地形・地物に囲まれた総構え型であるといえる。明石の築城は、元和4(1618)年開始され、翌年には完成して小笠原氏が入部している⁴⁰⁾。この性急さからみても防御機能の多くは自然地形を利用したものと推測できる⁴¹⁾。

さらに、矢守の示した城下町の変容系列が、明石においても認められる。延宝8(1680)年、本多氏は入部以降に西新町と東新町、新濱を新たに城下へ組み込んだ⁴²⁾。このうち西新町は、当初足軽屋敷のみが置かれた。「播磨国明石城図」には、すでにこの足軽屋敷が描かれている(図3・拡大図a)。明石川を越えて存在するこの西新町を指標として、明石の城下町プランの変遷時期を検討したい。

城下町建設の際、西国街道は城下町中央部を通過するよう付け替えられた。西新町は明石川左岸から本道へ繋げる折に、北上する道に設置された。西新町の町人地としての発展が最初に窺える記事は、慶安3(1651)年に当町の西側に家が建ったとする記述である⁴³⁾。城下に入るすぐ手前の足軽屋敷に付随して、明石郡の北部の村々との距離が近いという立地条件から、西新町に77戸の町屋が建設され

たとされる⁴⁴⁾。図3・拡大図aと図4・拡大図a'からも屋敷の増加が確認できる。足軽屋敷のみであった西新町に町屋が加わり、町人町としての機能を持ち始める。

図4には足軽屋敷と道を挟んで町屋が示されている。当初の城下町プランであった総構えの外に町が拡大し、内町外町型に移行したと考えられる。しかし、足軽屋敷を外郭と捉えたと、西新町が惣町に加えられまでは総構え型であったと考えることができる。

西新町への町屋の進出は、本多氏が延宝8(1680)年に惣町分とするまでの間に生じた。『明石記(上)』には、惣町中で西新町のみ年貢地と記されている。このことから、他の地子免の町とは区別されていたことがわかる。

IV. 明石の町人地プラン

(1) 町割・屋敷割の構成

ここでは、町人地プランについて図3・図4を用いて分析を行う。まず、図3には侍屋敷、町屋、足軽屋敷、水主中間屋敷、寺社といった地域制が示され、全てのブロックの区画と間数がわかる。間数は建築物に限らず、人丸社や淡路島までの距離など、城下域外の寺社や周囲の地形までも対象としており、注記箇所は広範に及ぶ。また、彩色による類型的表現がされており、各階層の居住地が明白であることも特徴といえる。それぞれの文字注記の方向は城郭を向いており、公用図の性質が窺える。これは戦略中間点として配置された明石の軍事機密に関する幕府の戦略的関心に応答した絵図内容であると推測できる⁴⁵⁾。なお、この図の町人地は朱色で示され、『町割年号記』による町人地の範囲と一致する。

図4は、注記が外堀内のみで、屋敷ごとになっており、郭内と侍屋敷の情報が詳細である。特に家臣団の屋敷に関しては、間口・奥行間数について1軒ごとに明記されている。一方、町屋では屋敷割が描かれており、家臣把握のための藩政用図と考えられる。

町割に関しては、両図とも短冊型プランが卓越する。一方、屋敷割は図3から、中央格地（江戸では「会所地」、名古屋では「閑所」と呼ばれる⁴⁶⁾）が確認でき、江戸型の区画が存在する。中央格地は、凡例の配色がなされておらず、江戸型である屋敷割の中央部を意識的に空地にして描写したといえる。具体的には、中町、東本町、西本町、細工町、材木町、船町、戎町に中央格地がみられる。その他、鍛冶屋町・東樽屋町・西樽屋町は京型の区画がみられる。次に、図4で屋敷割を確認すると、間口が四辺に向いていることがわかる。つまり、間口が追手門から海への通りに向く屋敷と、西国街道に向く屋敷が混在し、江戸型となっている。図3でみられた江戸型のうち、中町のみが京型へと移行している。

以上のように、町人地に関しては追手門・港付近では短冊・江戸型、姫路口・京口門付近は短冊・京型の形態がとられていた。よって、町人地に関しては江戸型と京型が混在していたといえる。さらに、図4から町人地以外の足軽・中間屋敷をみると、全てが短冊・京型によって形成されており、町人地とは異なった意識によって形成されたと考えられる。

(2) 町割プランの特色

町割プランに関しては、矢守一彦、足利健亮、中西和子らによる研究業績がある。これらは城下における町屋の配置パターンなどから、城下町における支配者の意図を読み取ろうとするものである。矢守は城郭に対する町屋の向きに注目し、縦町プランと横町プランに類型化した⁴⁷⁾。一方、足利は街道を基準として類型化を行った⁴⁸⁾。さらに中西は町割プランを、城下町経営の政略的・戦略的側面から考察し、町界線によって区切られた町組の方向を基準として分析を進めた。この結果、タテ町とヨコ町は、前者が豊臣城下町、後者が徳川城下町への志向が強いという⁴⁹⁾。

上記の成果を参照しつつ、明石の町割プランの特色について検討してみたい。なお、研究によってプランの表記が異なるため、本節では「タテマチ型」・「ヨコマチ型」を使用する。また、明石においては、町組の境界を確認する史料が管見の限りでは発見されていないため、前節の町割・屋敷割の構成から検討してみたい。

まず、町の序列の有無を確認し、町人地の具体的な構成についてみてみたい。『明石記(上)』には、「中町、東本町、西本町を最上と為す」と書かれており、これらは追手門に近接していることから、町に序列があったといえる。

表4は寛永18(1641)年の正月3日に登城してきた町年寄、町人や献上物を整理したも

表4 寛永18(1641)年正月3日における御礼町人登城

町名	屋敷主	献上物
東本町	ひめちや惣兵衛	御樽二ツ 御肴 するめ五れん、 こんふ貳束
	あつき屋三郎太夫	御樽二ツ 御肴 するめ五れん、 こんふ貳束
	なは屋次郎太夫	あふき
	あかゝべ屋九朗左衛門	あふき
	いつミ屋徳右衛門	あふき
	かわし屋伊兵衛	するめ五れん
西本町	いわや三郎兵衛	あふき壺箱 貳本入
	三木屋庄吉	あふき壺箱 貳本入
	太左衛門	あふき壺箱 貳本入
	大坂屋甚右衛門	あふき壺箱 貳本入
	九右衛門	あふき壺箱 貳本入
	あふら屋喜十郎	あふき壺箱 貳本入 きらゝ二ツ
信濃町 (中町)	八右衛門	あふき 壺箱
	ひせん屋徳左衛門	大くり 百參拾
東魚町	やを屋孫助	なかいも
	肴屋弥七郎	あかゝい
	肴屋庄三郎	たら
	肴屋源三郎	あかかい
西魚町	九朗左衛門	九年ほ
	たゝみ屋与兵衛	扇子壺箱 貳本入
	ひもの屋助左衛門	かいげ 貳本
明石町	ひもの屋長左衛門	手水ひしゃく 貳本
	庄吉	扇子壺箱 貳本入
	あわ屋理兵衛	いりこ 十けた

橘川真一・児玉昌己「明石藩家老・織田家文書 明石御代々御城主様 御入国并町割年号記」歴史と神戸24-2, 1985, 12-19頁より作成。

のである。登城者は中町・東本町・西本町の居住者が大半を占める。東魚町は野菜・海鮮物の献上をしている。これらの町には有力商家が存在したことを裏付けている。中町・東本町・西本町は、明石惣町の頭町として機能していた⁵⁰⁾。特に中町に関しては、信州から随従して転入してきた多くの御用商人が居住していたことから、その立場が明白である⁵¹⁾。一方、表4からは鍛冶屋町・東樽屋町・西樽屋町・材木町の町人の登城は確認できない。鍛冶屋町を例にとると、近代以降も農鍛冶、金物卸商が軒を並べていた⁵²⁾。このことから、これらの町は職人町に特化していた可能性がある。以上から、追手門付近を中心に町の序列が認められる。

屋敷割を図4から確認すると、西国街道沿いの屋敷は、東本町・西本町などを含めてすべての間口が街道に向けられている。鍛冶屋町・東樽屋町・西樽屋町などは全戸が街道に向いている。また、追手門を出てすぐの東魚町前の道にも間口を向ける屋敷が確認される。つまり、西国街道を城下町中心部に誘導し、街道中心のヨコマチ型によって町屋が形成されており、中西のいう徳川城下町の特徴をみることができる。これは、建設当初から商業型を意識して建設されたと解釈できる。

V. おわりに

本稿では明石を事例として、近世における新興城下町のプランについて考察を行ってきた。明石城を新たに竣工した理由として、西国の外様大名に対する抑止の必要性が挙げられる。さらに、その立地は、姫路城・尼崎城・洲本城の3城の重心に位置し、明石城の立地の軍事的な意義を指摘した。

矢守は、明石の城下町プランが自然囲郭による防衛線を築いており、総構え型の可能性があるとする。一方、侍屋敷の外堀を外郭とした場合、町屋は包摂されておらず、郭内専士型と捉えている。しかし、絵図によって描

写の変化する両馬川や西新町についての詳細な言及はしておらず、細部まで検討したとはいえない。さらに、正保期の「播磨国明石城図」では、侍屋敷は、外堀外に進出しており、郭内専士型に該当しないと指摘できる。

明石城下町の初期プランは、東西に河川、北に土塁・柵、南に海といった自然の囲郭を取り入れたものであったといえる。明石川の対岸に突出していた足軽屋敷（後の西新町）は、初期は町屋としての機能は持っておらず、外郭の一部であったと考えられる。このため、明石は総構え型によって建設されたと結論づけることができる。

一方、総構え型から内町外町型への移行は、西新町が惣町として機能した時期に契機を迎えるといえ、明石の城下町プランの変遷を明確に辿ることができる。

次に、町割・屋敷割については、「播磨国明石城図」では、材木町から細工町の範囲で江戸型が確認された。しかし、町割・屋敷割を詳細に記載している「播州明石図」によれば、「播磨国明石城図」で江戸型が確認されたブロックでは、中央格地が消滅しているものの、多くの間口が四方を向いていること、ブロックの中央部に水路を通してのことなどから、江戸型の存続が指摘できる。その中で、京型に移行した中町や初期から京型である鍛冶屋町・東樽屋町・西樽屋町が存在し、明石の城下町の複雑性を示している。

追手門付近の町は最上位の序列にあり、街区もタテに長いが、間口は四方に向けられる。一方で、中心街路の西国街道に沿う町屋は、例外なく間口を街道に向けている。これに関して、明石は小笠原氏の当初の建設を果たせぬまま、次代へ引き継がれたことや、城下中央を横断する西国街道の誘致によって、城下町が早い段階で商業・経済的性格に特化していたことが考えられる。すなわち、対西国の牽制・防御といった軍事色の強い城下町から商業型城下町への変遷の中で、家康期に

典型とされるヨコマチ型によって形成されたと推測できる。

本稿では明石を取り上げ、その城下町プランを明らかにしたが、今後、他の城下町との詳細な比較に基づいた研究が必要であるといえる。明石城下町の形成を補助した本多氏の城下町姫路との比較、さらに同時期の尼崎城下町との比較に焦点を当てていきたい。

(神戸大学人文学研究科・院生)

【付記】

本稿は2008年12月に奈良大学文学部地理学科に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。卒業論文作成には、奈良大学文学部地理学科の三木理史先生、土平博先生にご指導いただきました。兵庫県立図書館では、宮本博先生にご意見賜りました。また、本稿作成には、神戸大学人文学研究科の長谷川孝治先生にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。

なお、本稿骨子は、2009年8月1日に兵庫地理学協会夏季研究大会（於：西宮市大学交流センター）にて発表した。

【注】

- 1) 矢守一彦『都市図の歴史 日本編』講談社、1974、227-248頁。
- 2) 矢守一彦『都市プランの研究』大明堂、1970、307-348頁。
- 3) 関戸明子・奥土居尚「高崎城下町の形成過程と地域構成」歴史地理学38-4、1996、1-20頁、関戸明子・木部一幸「館林城下町の歴史の変遷と地域構成」歴史地理学40-4、1998、19-36頁。
- 4) 川名 禎「分散城下町の成立と統合原理—下総国関宿城下町の復元を通じて—」歴史地理学50-5、2008、23-41頁。
- 5) 渡辺理絵「城下町絵図の研究視角 城下町研究と絵図研究の還流を目指して」歴史地理学52-1、2010、69-83頁。
- 6) 土平 博「大和田原本陣屋の地域構成」歴史地理学155、1999、1-21頁。
- 7) 土平 博「近世郡山城下の「町割図」とその分類」（下高大輔、高田 徹編『大和郡山城』城郭談話会、2009）、239-251頁。
- 8) 中部よし子「近世明石城下町の史的研究（その1）」神戸学院経済学論集26-1、1994、149-164頁
- 9) 宮本 博「『町割』と『築港』（明石城史編さん委員会『明石城史』明石市教育委員会、2000）、259-263頁。
- 10) 宮本 博「明石城の土塁と櫓」歴史と神戸37-6、1998、5-20頁。庄 洋二「小笠原忠政の明石入封と豊前への国替史料」兵庫史学63、1974、40-47頁。
- 11) 明石市立文化博物館編『明石市明石城武家屋敷跡Ⅱ（本文編）（図版編）』明石市教育委員会、2000。明石市教育委員会社会教育推進課文化財係編『明石城武家屋敷跡（明石市埋蔵文化財年報平成15年度）』明石市教育委員会、2008。
- 12) この3点はいずれも、明石城史編さん委員会『明石城史（資料編）』明石市教育委員会、2000、475-578頁に収録されている。
- 13) 中野直行「地誌に見る明石」（明石城史編さん委員会『明石城史』明石市教育委員会、2000）、378-405頁。
- 14) 明石城史編さん委員会『明石城史』明石市教育委員会、2000、490-495頁。
- 15) 前掲13）512頁。
- 16) 前掲14）513-526頁。橘川真一・児玉昌己「明石藩家老・織田家文書 明石御代々御城主様 御入国并町割年号記」歴史と神戸24-2、1985、12-19頁。
- 17) 前掲9）252頁。
- 18) 前掲1）88-95頁。
- 19) 前掲12）573-578頁。
- 20) 前掲12）573-578頁。
- 21) 岡田進裕・黒田義隆『明石市史・上巻（復刻版）』明石市役所、1992、56-60頁。
- 22) 前掲21）162-168頁。
- 23) 尼崎城は明石の4か月前から築城を始めた。
- 24) 黒田義隆「小笠原忠真の明石築城」兵庫史学54、1970、18-21頁。
- 25) 第七代城主本多政利のみ移封の際1万石と減封となっているが、これは明石藩において過酷な政策を強いた罪によるものである。
- 26) 当初は「忠政」であったが、晩年には「忠

- 真」に改名。
- 27) 前掲21) 174頁。
 - 28) 文久3(1863)年「明石町旧全図」(神戸市立中央図書館所蔵)(原本は筆者未確認)から、侍屋敷西部と明石川に挟まれた大明石村の描写がある。
 - 29) 表2参照。
 - 30) 前掲14) 497頁, 21) 173頁。
 - 31) 明石町は絵図にも名称が記載されていない。しかし、「元和二辰年明石御代々御城主様御入国并町割年号記」には「一、右之節、思案橋、西本町と明石町と東西江御掛ヶ被遊候事」とあるため、後の戎町、船町に位置していたことがわかる。
 - 32) 『明石記・上巻 金波斜陽』(複写)(明石市立図書館所蔵)に記載。「小名」とは惣町14町を、より細かく分化したものである。なお、惣町は「元町」と記載されている。
 - 33) 前掲1) 392-395頁。
 - 34) 前掲21) 166-168頁。
 - 35) 前掲1) 394頁。
 - 36) 城下町の各々の範囲を合計したものと、東西の総計を記しているものでは、39間余の差が現われている。
 - 37) 城下町建設以来、東西のそれぞれの玄関口として、姫路口門、京口門が配置されていた。
 - 38) 前掲9) 252-255頁。
 - 39) 木村英昭「素顔の近世明石城：近世城郭のもつ軍事面の実態」歴史と神戸32-2, 1996, 27-31頁。
 - 40) 明石市社会教育課『明石文化史年表』明石市, 1951, 31-32頁。
 - 41) 中部は、築城に際しては「人民は領民のほかに堺などからも募集され、いそいで工事がされた。」と述べる(前掲8) 149-151頁)。
 - 42) 前掲21) 41-42頁。
 - 43) 前掲14) 518頁。
 - 44) 前掲21) 192-193頁。
 - 45) 前掲1) 88-95頁。
 - 46) 前掲1) 82-96頁。
 - 47) 矢守一彦「城下町プランにおける「近世」一とくに町割における「縦」と「横」について一」(豊田武編『講座・日本の封建都市 第3巻』文一総合出版, 1981), 144-169頁。
 - 48) 足利健亮『中近世都市の歴史地理』地人書房, 1984, 91-230頁。
 - 49) 中西和子「織豊期城下町にみる町割プランの変容—タテ町型からヨコ町型への変化について—」歴史地理学45-2, 2003, 39-41頁。
 - 50) 前掲21) 174-175頁。
 - 51) 前掲21) 162-194頁。
 - 52) 神戸市明石総局『聞き書き 明石 昔かたり』もくせい文庫, 1979, 58-59頁。